

これらの根本概念が内から把握されていない憾みを残す。また詩的形象に富むとしても聖書が世俗の文学と同じ精神において藝術と呼ばれうるかは大きな問題である。アウグスティヌスの哲学が「神と魂を知りたい」という『ソリロキア』の言葉で貫かれているとしたら、一層の自己認識と存在理解の深化が求められるところである。しかし、博士論文を基礎にして従来の研究文献を博捜し、豊富な註で論拠を示して描かれたアウグスティヌス美学の以上の像は、これからの研究が必ず顧みるべきひとつの新たな成果を示していると思われる。そしてこの書に描かれた美学の像は、未だ書かれるべくして書かれていないプラトンの美学を考える際にも、はなはだ示唆的であることを指摘しておきたい。著者キャロル・ハリソンは英国ダーラム大学でラテン中世の歴史と神学を専攻する講師である。

**Armand Maurer: *Being and Knowing.*
*Studies in Thomas Aquinas and Later Mediaeval
Philosophers***

Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1990, pp. X+496

渡 部 菊 郎

Armand Maurer 氏は Gilson の高弟で Toronto にある Pontifical Institute of Mediaeval Studies のメンバーとして活躍され、退官後の現在も精力的に研究されている方である。本書は氏の40年にわたる研究成果の結実ともいえる論文集である。序文において著者は、この間中世思想研究は新たな原典の校定出版を経て飛躍的に進展しているので、中世の哲学における研究状況をそのまま反映している、といっている。それゆえ、あるものは書き改められ、テキストも新しい校定本への注記がなされている。論文題目は本稿末尾に記したが、Thomas Aquinas のものが7、Siger of Brabant のものが3、Dietrich of Freiberg が1、Henry of Harclay が2、John of Jandun が1、Francis of Meyronnes のものが2、William of Ockham のものが5、エピローグとしてこれらの研究成果を踏まえて13世紀哲学との対比において14世紀哲学の特徴を浮かび上がらせる「14世紀哲学のいくつかの観点」、19世紀以来の中世思想

研究者たちにおける中世哲学の理解の変遷を示す「中世哲学とその歴史家たち」という講演原稿、計22篇の論文からなる。

各々示唆に富む力作であるが、紙数が限られているので収められた論文全てについて逐一論評することは断念し、ここでは副題にもある「トマスと後期中世の哲学の研究」という視点から全体的な論評を試み、また、研究成果を踏まえた著者の2つの講演はわれわれにとっても興味深いと思われるので、この点を中心に紹介することにする。

著者の研究スタイルは、Aristoteles (以下 Arist. と略記)、教父、Averoes 等伝統の原典研究を踏まえた上でのテキストにそくしたかなり精緻なもので、Thomas と Scotus, Ockham (以下 Scot., Ock. と略記) を主軸とする哲学史的な研究といえよう。論点の摘出における特徴として、Thomas を論じる時も問題定位においては後期スコラ、近代初期 (特に Descartes, Malebranche, Leibniz), Kant や現代の言語、分析哲学をも射程に入れているところがあげられよう。近代に影響を与えた Cayetanus・Suarez 等の Thomism を片方で論じつつ、それと Scot., Ock. との対比から Thomas そのものを論じるなど、Thomas の立場の独自性を浮かび上がらせつつその問いの哲学史的研究となるという両面を備えている (特に論文4, 6に顕著・以下論文番号のみ記す)。しかしその分 Thomas の全体的思想の中での問題の展開という点で評者としては物足りなさを感じるころもあり、また Gilson の解釈を踏襲しており首肯しかねるところもある。

Sigerus に関しては Ernest Renan 以来近代思想のモデルとなる信仰からの哲学の分離を中世世界にもたらした根本的 Arist. 主義の問題を広い歴史的視野において扱っている (8, 9, 10)。Thomas 以降のものを論じる際にも教父と Thomas の文脈との対比から近世初期にいたる方向性を示す「問題」の哲学「史」的研究であるところに特徴がある。Sco. は主眼的に取り上げてはいないが、存在の一義性の問題 (12) や Ock. や近代へ至る被造物における因果の理解の変遷の源泉や (14) 実在論をめぐる問題 (15) などを取り上げ、Ock. に関しては可能なものや唯名論の問題を同時代者との絡みで論じている (17, 18, 19, 20) また、「Ock. の剃刀」に関してなど (21) 解釈の再考を促したりする哲学史的「公平」さも随所に散見される。

さて、「14世紀哲学の幾つかの観点 (22)」において著者は、14世紀哲学には、確かにスコラ的方法、ラテン語、古代中世の著者と同じタームと引用など13世紀哲学と

の連続性は見られるが、いくつかの特徴があると、4点にまとめている。

1. 1260年代の Averoes 主義の台頭と1277年の断罪によって、特に Paris と Oxford において Arist. に対して慎重で批判的な態度が見られるようになり、新たなそしてより適切な基礎を求め始めた。キリスト者の神に到るためには Thomas が模範とした Arist. 的な自然学的証明ばかりではなく、形而上学的論証も必要である。それは Scot. の無限な有の証明において頂点を迎えると著者は見ている。Eckhart も存在を越えた無や一者にキリスト教的真理の基盤を求めたし、Nicholas of Autrecourt は初期ギリシヤの Atomism に新たな基盤を求めるようになる。

2. 全能の神と単に非必然的な被造物を強調する結果、可能なものの思弁に従事するようになった。Scot. 主義者や Ock. 主義者達にとって神は全能で自由な創造者であるので、神だけが必然的な存在であり、非必然性が自然と恩寵の秩序を支配している。したがって可能なもの、無矛盾的なものについてのみ学的必然的な命題を形成できる。これが Scot. が神の存在の証明を世界の動者や原因が有するという現実的な非必然的な事実よりも無限な有の可能性の上においた理由である。また、Ock. 主義者にとっては人間の存在も人間が人間であることも必然的ではない。しかしもし人間が存在すると前提するならば「人間は人間である」も必然的になるとして、前提的なものが主題となる。

この現実的なものから可能なもの・前提的なものへの哲学的転回は進行し、Scot. は形而上学の対象は現実的な実在の有ではなく、可能的な有、本質または何性的有とした。現実的な有は形而上学を中心点だった有の単なる属性又は限定になってしまい、もはや哲学は実在論的ではあり得ず、哲学の主要関心は実在を担う可能的なものとしての本質となる。また Ock. にとって現実的に実在する世界は個物からなるが、哲学者の対象は普遍であり普遍性はただ名辞のみに見出される。Ock. は名辞を要素とする命題が哲学の対象であると結論した。こうして哲学は第一義的・直接的に現実的に実在する世界の研究ではなく、言語の研究に向かうことになる。

3. また、14世紀には自然神学や形而上学の多くの議論が蓋然性に関する弁証的推論に還元されるようになった。蓋然性とその段階についての関心は経験主義と唯名論の結果である。世界は個物からなっており、相互に何の共通点もない。このような個物の唯名論的な世界においては一つのものの知は他のものの知へとは導かない。各々のものはそれ自体で知覚されるしかない。それゆえ何かは他のものの作用因であること

は証明しがたく、経験だけがそれを確証する。感覺的对象の明瞭な直観と人間の内的はたらきと感情、それゆえ、可能なものの帰される無矛盾の原理は確かであり、それ以外は蓋然的な知の領域となる。弁証的推論の優位はスコラの議論の傾向を定めた。

4. 最後に最も重要なことは、唯名論と個の強調であるという。Ock.自身は現代人が言うほどの徹底した唯名論者ではなく「中庸の」唯名論者である。しかし Ock. はこれによって中世思想に革命を起こした。Ock.にとっては実在は徹底して個物であり共通普遍的なものではない。名辞や概念でもそれらが実在である限り個的であり、それらの普遍性はただ多くのものの印であるという事実のみ存する。Ock.は個物は数においてのみならず、本質においても異なるとした。中心的思想は単純に個である実在性の概念である。

以上のような観点から Scot. と Ock. が次の世紀の思想のスタイルを決定したと論じている。

「中世哲学とその歴史家たち(23)」において、著者は歴史家たちの間で中世の哲学の本性について特に神学と哲学の関係について意見が一致しているわけではないので、19世紀以来の中世「哲学」の理解の変遷をたどり、Gilsonによる新しい展開をみる。

中世哲学の「学問」的な研究は19世紀に、Victor Cousinによって始められた。しかし彼は中世の哲学は「神学」と考えていた。彼の影響のもとに Barthélémy Hauréau など中世の歴史家たちの学派はルネッサンス以来のスコラ主義に対する偏見を取り除き、中世世界にそれ自身の方法を持った哲学をみ、カロリング期以来の「学校」で教えられた哲学とする。

19世紀の後半において、Ehrle, Denifle, Baeumker, Erdman, Uberweg, Heinze, Picavet, Willmann, Mandonnet, Grabmann たちの探求によって中世の哲学の複雑さがあらわれるようになった。世紀の変わり目に大きな影響を持った Maurice De Wulfによると、学校哲学はアゴラ哲学と同じ意味のない定式化であり、中世哲学とは指導的スコラ学者による共通の哲学的体系であり、中世哲学の中世神学からの独立性を強調する。

そして Arist., Avicenna, Averoes, Platon, Neoplatonism の影響など、広範囲に研究は進んだが、このような状況で Etienne Gilson は、Descartes とその背景としての中世哲学を学ぼうちに、Descartes 以上の形而上学者を中世の内に見出し、Thomas, Bonaventura の研究を通して、両者全く異なった哲学であることを確信し、

通史的研究から中世に共通のスコラの総合はなかったとする。また、Thomas の有と存在に関する独自性を見、洗礼された Arist. 主義とか共通のスコラ主義の代表者とする見解を退ける。更に彼は歴史的研究を踏まえて、中世の哲学の源泉にはギリシャ哲学特に Arist. 主義と、キリスト教の啓示とがあり、キリスト教の決定的影響の内に古代世界においては知られていなかった哲学的概念が中世で作られたのであるから、中世哲学はキリスト教「哲学」の名に値する。キリスト教哲学はしかし、Augustinus 主義、Albertus 主義、Bonaventura 主義、Thomas 主義、Scot. 主義、Ock. 主義など異など異なった相互に還元できない哲学的総合を含み、どれも神学から独立ではない。単なる哲学者によってではなく、彼らの神学の理性的な道具として哲学者によって作られたものである。彼は神学の著作の中に哲学を、理性的に証明されたテーゼを引出し、中世のキリスト教「哲学」として示す。彼らは哲学的に思考し、哲学の新しい概念を形成した哲学者なのである。こうして中世「神学」が中世「哲学」の理解のための鍵となる。

最後に著者はわれわれは近代的概念によって中世を理解する危険に常に取り囲まれているのであり、知性とイマジネーションをはたらかせて常に緻密な努力を重ね、彼らの思考法に従って、彼らの精神によって理解していかなければならないという。

確かに中世思想・哲学を学ぶものの心しなければならぬ点であろう。

収録論文の表題は以下の通りである。

1. Form and Essence in the Philosophy of St. Thomas
2. St. Thomas and the Analogy of Genus
3. A Neglected Thomistic Text on the Foundation of Mathematics
4. St. Thomas and Eternal Truths
5. St. Thomas on the Sacred Name 'Tetragrammaton'
6. The Unity of a Science: St. Thomas and the Nominalists
7. St. Thomas and Historicity
8. *Esse and Essentia* in the Metaphysics of Siger of Brabant
9. Between Reason and Faith: Siger of Brabant and Pomponazzi on the Magic Arts
10. Siger of Brabant on Fables and Falsehood in Religion
11. The *De Quiditatibus Entium* of Dietrich of Freiberg and its Criticism of

Thomistic Metaphysics

12. Henry Harclay's Question on the Univocity of Being
13. Henry Harclay's Questions on Immortality
14. John of Jandun and the Divine Causality
15. Francis of Meyronnes' Defense of Epistemological Realism
16. The Role of Infinity in the Thought of Francis of Meyronnes
17. The Role of Divine Ideas in the Theology of William of Ockham
18. Ockham on the Possibility of a Better World
19. Method in Ockham's Nominalism
20. William of Ockham on Language and Reality
21. Ockham's Razor and Chatton's Anti-Razor
22. Some Aspects of Fourteenth-Century Philosophy
23. Mediaeval Philosophy and its Historians

なお、氏は現在オッカムに関する著作を準備中とのことである。